２０１７．１．２１　大草

読書メモ

42．梅原猛　「あの世と日本人」　日本放送協会

43．中野孝次　「セネカの言葉」　岩波書店

44.　國廣正　「それでも企業不祥事が起きる理由」　日本経済新聞出版社

45.　久保継成　「法華経は何を説くのか」　春秋社

46．深町隆、山口義正　「内部告発の時代」　平凡社

＜山折哲雄「霊と肉」から＞　Ｐ２３４

・浄土系の仏典には、上方世界とか下方世界とかいって垂直的な宇宙認識がみられるが、基本的には東西南北の水平的方位観が優位を示し、西方極楽浄土などはその典型である。つまり、天国と地獄という垂直的な観念に対して、此岸と彼岸という水平的な世界観が仏教本来の者であり、浄土思想のものであり、浄土思想のユートピア観もその仏統に立脚している。

＜梅原猛　「あの世と日本人」から抜粋＞

梅原猛は、仏教の精神は解脱と平等の二つからなっているという。

・欲望を滅すには、戒、定、慧が必要である。

戒とは戒律を守ること、定とは瞑想すること、慧とは知慧を磨くことです。釈迦は「四諦十二因縁」の説をとなえます。四諦十二因縁の説はすべてこの欲望の世界から解脱することを教える説です。

・仏教はカースト制の支配するインド社会において平等の思想を説くものですが、この平等の思想が患いになって、仏教はインド社会から追い出されたというふうに思われます。

・そしてこの仏教の平等思想が聖徳太子によって国家理念の中に取り入れられ、低い姓の者が高い役職に就くことができるようになります。太子の「冠位十二階」とい考え方には、仏教を国教として採用し、仏教の平等思想によって姓の低い人間も高い冠位に登用することを可能にしたものであると私は思います。インドと違って日本では仏教が氏姓社会を崩壊させたということになります。⇒仏教はカースト制度に対抗できなかった。なぜ？

＜中野孝次「ローマの哲人セネカの言葉」から抜粋＞

・（道徳の欠如）どうもこういうことをまた繰り返し言わねばならないのは気が重いけれども、やはりこれを言わなければ話が進まない。それは、現代日本では道徳性が完全に欠落しているということだ。つい最近の事件でも、外務省の役人が途方もない金額の裏金を作っておいて、庁内で流用するのが慣わしであったと判明しても、恬としてそれを恥じる風がない。恥じないばかりか、誰かが責任をとって詫びたという話も聞かず、幾人かが司直の手にかかっただけで終わってしまった。これなぞ現代日本人の役人に恥の意識も悪いことをしたという自覚もない。すなわち、道徳の欠けていることの端的なあらわれであった。

・政治家に至っては、政治献金という賄賂にまみれて、、、

・経済界でも同じで、利得の追求ばかりで総会屋も利用し放題、、、

・日本の高度成長の時代に利益だけが価値との時代の中で生きてきた人々は、正邪・善悪を問わず考える心を養われなかったと推測する、、、

・（教育の不在）教育の現場でも、修身とか道徳とかは、嫌われて、物事をまず善悪とか正邪の観点から見るという心の習慣が養われなかった。我慢とか辛抱、忍耐、節制、克己、努力、訓練、秩序、規律、約束を守るといった徳はすべて封建時代の遺物のように言われ、教えられなかった。その代り、自分の好きにして何が悪いという考え方が教えられた。規律なくして自由ナシ、努力なくして向上なしという当たり前のことが教育されなかった。

・これらみな戦後５０年余り、アメリカ輸入のデモクラシーを自由放任とのみ解し、それが本来は秩序や順守と対になっていることを重視しなかったせいだ。その結果、日本は世界でも珍しいくらい道徳律のない国になってしまっている。事の正邪、是非、善悪をはかる共有の価値観がなくなったままなのである。これでは、人間を人間たらしめる心の柱がないまま生きているようなものだ。

・古代社会（ギリシャ、ローマ、中国など）は、心の問題では現代よりはるかに優れていた感を新たにした。道徳という目に見えない心の面の修養という点で、古代人の方がずっと高尚なしっかりした考えをもっていたのだと思わざるを得ない。

⇒ここまで極端な中野の意見もどうかと思う。概ねそのようなことは言えると思うが極端すぎるのではないか。

・（余談：一日一日が大切）一日一日を自分が主となって全力で生きた人の人生はよく生きた人生といえる。それがいかに短い期間のものであっても、一日一日と全き力で生きた者がよく生きたといえるとセネカはいう。⇒道元の正法眼蔵の中にも同じことが説かれている。

・義理や欲望や習慣に従って世俗のことばかりにかまけていたら「一生は雑事の小節にさへられて、空しく暮れなん」という言葉が徒然草にあるが、セネカはそれよりもっと徹底して時間の浪費を戒めている。「閑暇な生活」を早くすべきとセネカは言う。今日が最後の日かも知れないよとセネカは言う。

⇒セネカはネロ皇帝からいつ殺されるかも知れないことを知っていた。

＜國廣正「それでも企業不祥事が起こる理由」から抜粋＞。

・ルール重視の社会に変化した日本社会においては、コンプライアンス経営の実現は、企業が競争を勝ち抜いていくために不可欠の経営方針になる。言い換えれば、コンプライアンス経営とは、単なる道徳論や精神論ではなく、新しい日本社会において企業がルール違反による不祥事を防止し、安定的、持続的に成長していくために必須のリスク管理なのである。

・家族や子供に説明できるか。コンプライアンスは「知識」ではなく「意識」の問題である。細かいルールを覚えこんでも「なぜルールが存在するのか」という基本が理解できていなければ、すぐに忘れる。

⇒意識が社会環境の変化に対応していけないために、不祥事は繰り返される。また、意識が行動を伴わないことに最大の問題がある。なぜ、意識しているのに行動が伴わないのか？よく考えてみる必要がある。ここに再発防止の意識に関するヒントがありそうである。

＜久保継成「法華経は何を説くのか」から抜粋＞Ｐ１０１

・私は私達人間が、3次元の世界に生きながら意識するしないに関わらず、もう一つの次元に触れながら生きているのではないかと思っている。―――星の例。昔の光を見て感慨を憶えるのは私が現に生きており、それを見る今という一瞬である―――

このことは、気づいているかどうかに関わらず、私達の日常の一瞬一瞬に私達は実は永遠と触れ合いながら生きているという一例ではないのだろうか。―――私は、石を見てもそう思うし、星を見てもそう思う。太陽もそう、月も―――

・法華経は永遠の釈尊に私が触れていることを教えてくれている。私はそのことを自分の実感を通して納得する。

⇒これはどういう意味か？理解に苦しむ。著者は、霊友会会長とのことで宗教家、大正大学の教授もつとめた宗教家。

＜深町隆、山口義正「内部告発の時代」から抜粋＞

・会社の上から下まで「穏やかな性格の優秀な人たち」を揃えていながら潰れてしまった会社を思い出さずにはいられない。1997年に自主廃業した山一証券である。「いい人」ばかりでは、組織の健全性を保ちつづけることはできないという典型例であろう。

・人間が変わるのは難しいが、企業が体質を変えるのはそれより難しいのかも知れない。

・ガバナンス、コンプライアンスの仕組みばかり作っても何の意味もないことをオリンパスや東芝は示した。要は、器ではなくそこに盛る中身の問題なのだ。

⇒中身をどう盛るか？考えなければならない。（この本には記載されてない）

新年なので一首詠む

「「　年始会　友と集いて　酒を飲み　声高らかに　昔を語る　」」

以上